D・H・ロレンス『死んだ男』（1931年）と折口信夫『死者の書』（1939年）の関係性

要旨

D・H・ロレンスの『死んだ男』（1927年頃作、1931年出版、1936年日本で翻訳出版）と折口信夫『死者の書』（1939年作、1943年出版）とは関係があるのではないか？　折口信夫はロレンスの『死んだ男』を読んで大いに触発され、日本版『死んだ男』として折口信夫の代表作と目される『死者の書』を書いたのではないか？　もしそのような指摘をすでに行なっている人がいたら、ぜひ教えてほしい。

　最近、D・H・ロレンス（1885‐1930）に関心を持って、調べ始めた。

　きっかけは、第82回身心変容技法研究会で同志社大学神学部教授の関谷直人さんと話をしていた際、D・H・ロレンスが『死んだ男（The Man Who Died）』という小説を出していて、死んで蘇って女性とセックスをして子どもをもうけるという内容だと聞いたからだった。

　もちろん、『チャタレイ夫人の恋人』（伊藤整訳）の作者として名前は知っていて、学生時分に小説も読んだことがあり、それなりに面白かったが、心に響くというほどではなかった。日本で起きた、わいせつ性が問われた「チャタレー事件」のこともある程度知っていたが、読んでみて、どこがどのようなわいせつ表現なのか、また表現の自由とのかねあいについてもピンとは来なかった。

　要するに、D・H・ロレンスも伊藤整訳の『チャタレイ夫人の恋人』も、わたし自身の人生に痕跡を残すほどの作家でも作品でもなかったということである。

　ところが、最近になって、2つの補助線（一つが関谷直人同志社大学神学部教授、もう一つが吉村宏一同志社大学名誉教授）が引かれ、俄然、D・H・ロレンスに興味を持った。

　第一に、『死んだ男』。これを、昭和11年（1936）2月5日昌久書房発行の織田正信翻訳で読んでみた。そしてたまげたのである。

　何にたまげたか。イエスが蘇って女性とセックスして子どもをもうけるという、『ダ・ヴィンチ・コード』のような反カトリック的かつグノーシス主義的なモチーフもそれなりに興味深かったが、何よりも子どもをもうける相手というのがエジプトとのイシス神殿に仕える巫女だったことだ。これにはしんそこ驚いた。

　つまり、D・H・ロレンスは、一神教の革命家イエスを蘇らせて、多神教の根拠地のエジプトのイシス・オシリス信仰と交配させたのである。イエスと神殿巫女との交わりも、それだけでキリスト教にとっては大スキャンダルな事態の表現であろうが、その身体レベルの交合のみならず、信仰上の交合とも言えるイエスとイシス信仰との交わりを設定した点で画期的とも革命的とも反逆的ともいえよう。したがって、さまざまな評価も批判も可能であろう。

　『死んだ男』は二部構成で、第一部では、蘇った男は、イスラエルの近くの農家らしい夫婦の家にかくまわれることになる。その第一部の最後の方で、死んだ男＝甦った男＝イエスは、鶏の生態を通して性と生命の深奥にあるものを見出す。そして、「お前は自分の領土と、お前の肉体にそぐう雌を見つけた」（前掲同書50頁）との内なる声を聴く。

　第二部では、ダマスカスから西に向かって歩き続けたその男が、フェニキアのシドン（現在のレバノンのサイダ）に行き着き、そこで、7年間、「探求のイシス」を祀るイシス神殿に20歳から7年間仕えてきた27歳の神殿巫女と出会い、結ばれることになる。その神殿巫女は、元々父がローマ帝国のシーザーやアントニオと懇意にしており、親交があったが、シーザーの死後ローマ皇帝になるアントニオと交わってもまったく何も感じることがなかった、言わば不感症の女性である。

　そこで、彼女は、「世に類稀な女人は、再生の男を待つものぢや」（同62頁）との予言的な言葉のままに神殿巫女を続けて来て7年、終に、その運命の男「再生の男」と出逢うことになったのである。こうして男はイシスの神殿で神殿巫女の女人と交わるのだが、その前にこのように思う。「わしは熱狂の彼女を、女性の神秘に燃えた彼女を、独り居らせねばならぬ。」（同92頁）と。

　これは、エジプト神話的文脈においては、「探求のイシス」が死んだ夫オシリスの肉片を探し求めて「再生」せしめるイシスの秘儀の物語と重なる。その秘儀の結果が、新たないのちの誕生であった。

　彼女は男の「傷」を癒し、真に肉身を蘇らせる。その時男は自覚する。

「彼は静かに、おだやかに、全くの間であつた彼の生の深底から、何ものかゞ生まれ出るうごきを感じたのであつた。暁だ、――太陽の誕生だ。彼の内部の真の闇から、一つの新らしい太陽が、身内に登りはじめた。おそろしい希望に身をふるわせて、日の出を待つてゐた、……『今こそ過去の自我を脱した、私は新なある者だ……』」（同101頁）

　そして死んだ男は、「われ甦れり！」（同102頁）と、生の甦りの頂点でイシス神殿の巫女と交わった。男は言う。「これこそ大いなる償ひ、――交感にひたることこそ。灰色の海と雨、――濡れた水仙と我が待つ女人、――眼に見えぬイシスと太陽との交流・合致」（同105頁）

　こうして、子どもが生まれることになるのだが、それにより、死んだ男＝甦った男＝再生の男＝イエスは去っていくことになる。このローマの怪作『死んだ男』の最後は、次のような死んだ男＝甦った男の言葉で終わっている。

「わしはわしの生命と復活の種子を蒔いて来た。そして現世の選ばれた女人の上に、永遠の交感を及ぼして、わしの肉身に彼女の香を薔薇の精のやうにつけてゐるのだ。彼女はわしの生命の中核にある、こよなく尊いものだ。黄金色の肌なめらかな蛇が、またしてもとぐろを巻いて、わしの生命の樹根に眠つてゐるわ」（同112頁）

「小舟よ、わしを運べ。明日も亦日が輝るわ」（同112頁）

　いやはや、D・H・ロレンスという作家は、なかなかの怪人アウトサイダーのようである。

　実は、京都の我が家の近くに日本ロレンス協会の設立者の一人で、ロレンス研究者の第一人者の一人の同志社大学名誉教授の吉村宏一先生が住んでいる。その先生が毎日我が家の前を通ってよく散歩され、たまに話をすることがあるのだが、今日、我が家に寄ってもらって、『死んだ男』とロレンスについて、小1時間ほどいろいろとお話を伺ってみた。これが第二の補助線である。

　1985年生まれのロレンスが、労働者階級の出身で作家となり、恩師の夫人のドイツ人貴族の女性フリーダと駆け落ちして、イタリアに逃亡し、エジプトやオーストラリアやアメリカなど世界各地を旅して回り、その間、推定では1927年に『死んだ男』を書き、最後に1928年に『チャタレイ夫人の恋人』を書いたことだろうということもだんだんとわかってきた。

　つまり、『死んだ男』はロレンス最晩年の遺作に近い小説ということになる。吉村宏一先生にいろいろと訊ねてみると、ロレンスが独自の生命主義思想を持ち、ニーチェやドストエフスキーの影響を受けていたということも見えてきた。

　なるほど、なるほど。確かに、『死んだ男』の主人公はニーチェの「超人」と似ている。キリスト教的終末論というよりも、ギリシャ的永劫回帰論に近しいものがある。このロレンスのキリスト教観というのも、異教的彩りを帯びた大変スキャンダラスなものにもなり得る独自のものであったようだ。

　そのあたりも、さらに深掘りしたいところだが、わたしの目下の関心事は、実は、折口信夫がこのD・H・ロレンスの『死んだ男』を読んで、『死者の書』を書いたのではないか、という疑問であり、問いである。

　言葉は悪いが、折口さん、あんたの『死者の書』はロレンスの『死んだ男』のパクリじゃないの！　という問いである。

　調べてみると、昭和11年に『死んだ男』の翻訳が織田正信訳で出ている。そして、折口信夫の『死者の書』が最初に『日本評論』に発表されたのが昭和14年（1939）1～3月号で、その後昭和18年（1943）年に青磁社から単行本として出版されたのだ。折口信夫が『チャタレイ夫人の恋人』などで評判を呼んでいるロレンスのこの『死んだ男』の翻訳を読んだ可能性は否定できないだろう。

　そして、彼はエジプトの「死者の書」のイシス・オシリス神話と日本の古代史と中将姫伝説を踏まえ、日本古代の大津皇子と藤原南家の郎女との魂の交合との物語として『死者の書』を書いたのではないか。このように推測したのである。

　折口信夫の『死者の書』がイシス～オシリス神話を踏まえていることは、すでに先学の研究によって明らかだが、しかし、折口のその発想のより直接的なインスピレーションとアイデアのソースは、ロレンスの『死んだ男』にあったのではないかというのがわたしの推測である。両者の共通点として、

①死者（甦った男）と巫女との交感が描かれる点（『死んだ男』ではイエスとイシス神殿の巫女、『死者の書』では大津皇子＝滋賀津彦と藤原南家の郎女、また滋賀津彦は処刑される前に大織冠藤原鎌足の子の耳面刀自との間に子どもを欲していた）

②どちらもが太陽神格を持つこと（『死んだ男』ではオシリス～イエス・キリストの太陽神神格、『死者の書』では天若彦と阿弥陀仏との太陽神仏・光の神仏）

を挙げることができる。

　また、両者の相違点として、

①死者と巫女との交感が、『死んだ男』では肉身の交わりと妊娠につながること、『死者の書』では霊的交感としてそのヴィジョンが山越えの阿弥陀像の当麻曼陀羅として織られること。

②また、『死んだ男』では男が流浪の旅に出、『死者の書』では滋賀津彦は肉身では現実化せず霊的な面影（俤）としてのみ南家の郎女の霊感の中に現われること、

などが挙げられる。

　ちなみに、『古事記』でオシリスーイシス神話に対応するのが兄神たちに二度も殺されて甦るオホナムヂ＝大国主神であるが、折口の『死者の書』十には、大国主神＝八千矛神の歌う長歌「八千矛の神のみことは、とほ／″＼し、高志（こし）の国に、美（くわ）し女（め）をありと聞かして、賢（さか）し女（め）をありと聞（きこ）して……」とあり、『古事記』の中にエジプト神話と通じる神話素があることも興味深く、スサノヲ～大国主神の出雲神話とエジプト神話の類縁性をどう捉えるかも折口信夫だけでなく、異教的な習合の様相に関心を持っていたD・H・ロレンスにも通じる問題意識であったと思うのだ。

　わたしも長らく折口信夫の『死者の書』に魅了されてきた一人であるが、その発想の先鞭者にD・H・ロレンスがいたということは、もちろん、折口さんの不名誉でも何でもなく、彼の発想のきっかけや源泉と、それをいっそうオリジナルな形に練り上げていく彼の文学的想像力の特徴と凄みを改めて感じさせてくれるよい機会となった。

　わたしはこの推測を早速吉村宏一先生にぶつけてみたが、先生の反応は「ようわからんけど、おもろいな」という感じであった。その可能性はある。ないわけではない。そこで、もうちょっとこの推測を確証づける証拠を探してみよう、ということになった。

　それが、今日の先ほどの話である。

　D・H・ロレンスの『死んだ男』によって折口信夫の『死者の書』が甦り、わたしの中の世界神話熱が再度大爆発し始めたのである。